

令和 4 年 6 月 29 日現在

機関番号：47704

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K13115

研究課題名(和文)NHK「みんなのうた」を中心とした日本児童音楽文化の変遷に関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文)Historical sociological research about the transition of Japanese children's music culture centered on NHK's "Minna-no-uta"

研究代表者

佐藤 慶治 (Sato, Keiji)

鹿児島女子短期大学・児童教育学科・講師

研究者番号：10811565

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：NHKの教育音楽番組「みんなのうた」(1961～)については、放送楽曲の知名度に反して先行研究が大変少なく、特に番組開始初期である1960年代および1970年代における番組の形成と受容については、その背景や実態が明らかになっていなかった。本科研費研究においては、主に番組開始初期である1960年代から1970年代に焦点を当てる形で、複数の論文執筆および学会発表、またアウトリーチとしてのシンポジウム開催等を行い、研究成果を公開してきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、主に「みんなのうた」開始初期である1960年代から1970年代における同番組の動向を分析することによって、同番組と「うたごえ運動」との関連性や、更には同番組の持っていた「国民文化」的側面を明らかにし、日本音楽教育史における同番組の位置づけを定めることができた。現代日本の児童音楽文化および音楽教育文化は多様化・複雑化が進んだ状況にあるが、その大きな源流の一端を解明することができたと言える。

研究成果の概要(英文)：Contrary to the popularity of the broadcast songs, there have been very few studies on NHK's music educational TV program "Minna-no-Uta". In particular, the background and actual movement of the TV program's formation and acceptance in the 1960s and 1970s, the early years of the program's start, had not been clarified. In this study, principal investigator focused mainly on the early years of the TV program, writing several papers and presenting at conferences and holding symposiums as outreach.

研究分野：音楽教育学

キーワード：みんなのうた 学校音楽教育 日本放送協会 戦後民主主義 後藤田純生 うたごえ運動

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の前段階として、佐藤が博士後期課程において行った明治期唱歌教育についての研究が存在する。この研究においては、主として「翻訳唱歌」の分析を通じ、「唱歌というジャンルが形成されるまでの過程の分析」、「尋常小学校における唱歌教育を通じた国民形成」という視点で考察を行った。結果として、国民国家成立期の国民形成には、「国民文化」という概念が大きな影響を与えているという知見を得た。

また、唱歌の研究を進める中で関心を持っていた戦後における童謡と唱歌の同一視について文献等を検討した結果、GHQ 統制下の児童音楽文化再編において始まっていたことが判明したが、そこで使用されている童謡・唱歌の楽曲が、「みんなのうた」でカバーとして放送された童謡・唱歌と重複する部分が多かったということがある。更に、唱歌教育もそうであるが、日本の文化形成の特徴として、それまでの日本になかった文化ジャンルを創出する際には、「翻訳」が大きな役割を果たしていることが多い。「みんなのうた」でも初期に海外曲が多く放送されるなど、類似の形成過程が見られるため、まず「翻訳歌」を通じて「みんなのうた」放送初期の分析を行うことについての着想を得た。

その研究を進める中で国立国会図書館での調査を行い、「みんなのうた」初代チーフ・プロデューサーである後藤田純生の述懐等の資料を発見することができた。それによって、「みんなのうた」が戦後の「うたごえ運動」に触発されたものであることが判明し、「国民文化」の視点で分析を行うという着想に至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、NHK 教育音楽番組「みんなのうた」を中心として、戦中から 1970 年代までの日本における児童音楽文化の展開について分析を行うことにより、現代日本の文化様相を更に深く理解し、多様化・複雑化の進んだ日本の児童音楽文化史の軌跡をたどる道筋をつけることである。また、初期の「みんなのうた」そのものが持っていた「国民文化」的側面を明らかにし、日本音楽文化史における同番組の位置づけを定めることも目的の一つである。

恐らく、本研究で導き出されるその時期の「みんなのうた」の展開は、戦後民主主義の文脈における新たな国民像の創出と関連する種々の社会・文化の動向と結びつけられるだろう。それを本研究では「国民文化」という概念で表しているが、この用語は元々、戦時体制における国家主義の下で使われていた。それを戦後の大衆文化と結びつけるのは一見、無理があるようにも思えるが、戦中の「国民文化」形成と戦後の文化形成は、全く断絶されたものではない。例えば、戦後日本の音楽文化運動である「うたごえ運動」は、「うたごえは平和の力」というスローガンの下、主として左翼的な運動と結びつく形で全国に広まっていくが、渡辺裕『歌う国民 唱歌、校歌、うたごえ』(2013)で論じられているように、ここでは戦中の国家総動員体制で頻りに用いられていた「国民文化」や「国民音楽」といった用語が積極的に使用されていた。これについては、唱歌教育に代表される戦前・戦中の「国民文化」形成の構造(外枠)のみが残り、その中身だけが戦後民主主義に基づく新たな国民像に入れ替えられたためとされている。

「みんなのうた」についても、番組の初代チーフ・プロデューサーを務めた後藤田純生が「うたごえ(歌声運動)のスピリットを少年少女たちに結びつけた」と述べており、「うたごえ運動」と同じ目的(戦後民主主義に基づく新たな国民像の創出)を見出せるため、その視点からの実証を行うことにより、初期の番組形成の背景を探った。

### 3. 研究の方法

以下 6 つの視点で「みんなのうた」についての分析を行った。「5. 主な発表論文等」に記載している複数の論文内において、それぞれのテーマを扱っている。

#### 戦中の NHK 関連の「国民文化」

「みんなのうた」に似た名称の音楽ジャンルとして、戦前の NHK ラジオ番組「われらのうた」が存在する。この番組の前身は、1936 年に始まり、『椰子の実』や『めんこい仔馬』などの有名曲を誕生させた「国民歌謡」であった。「国民歌謡」は 1941 年に「われらのうた」へと名称変更され、歌手が既成の「国民歌謡」の楽曲や軍歌、小学唱歌を歌う形式の番組となった。更に大東亜戦争の開戦とともに「国民合唱」へと変更され、戦後は「ラジオ歌謡」となり、「みんなのうた」開始翌年の 1962 年まで放送が続けられた(「みんなのうた」で放送される『雪の降る町を』等の楽曲は、「ラジオ歌謡」で先んじて放送された)。また、戦前における NHK 音楽コンクールでも同じような名称が見られる。1932 年に「児童唱歌コンクール」として開始され、現在まで開催の続くこのコンクールは、1941 年に「東亜児童唱歌大会中央大会」となり、更に 1942 年には「全国少国民『ミンナウタへ』大会」となった。すなわち戦中の「ミンナ」は、「少国民」と同義であり、同コンクールや上記の「われらのうた」は、国家総動員体制の中での「国民文化」運

動の一種として位置づけられていたのである。戦中におけるこれらの「国民文化」について楽曲等の分析を行い、「みんなのうた」と比較することによって戦中・戦後の文化的差異を導き出す。

戦前に由来する唱歌・童謡・民謡

1960-70年代の「みんなのうた」では、30曲前後の唱歌・童謡・民謡のカヴァー楽曲が確認されるが、これらの楽曲群には1945-50年代の児童雑誌等に掲載されていた楽曲と重複するものが多く存在する。また、そのような児童雑誌の中には「みんなのうた」という名称が同番組に先駆けて使用されていたものもあり、GHQ統制下におけるこれらの児童文化とNHK「みんなのうた」との関連性を分析することにより、GHQ統制下での児童音楽文化再編の延長上に同番組が位置していることを実証する。

「歌声運動」との関連性

先に述べたように、NHK「みんなのうた」初代プロデューサーの後藤田は、同番組が「歌声運動」に触発されたものであることを述懐で論じている。また、「歌声運動」は新しい「国民文化」を標榜していたが、《おお牧場はみどり》など多くの楽曲が「みんなのうた」でカヴァー楽曲として児童合唱団が演奏する形式で放送されており、関連性を分析することで、「みんなのうた」の「国民文化」的性質をさらに実証する。

西洋楽曲を原曲とする「翻訳歌」

例えば小学校の音楽科教材にもなった《線路はつづくよ》は、もともとはアメリカの線路建設現場で働くアイルランド移民たちの労働歌であり、性的な歌詞も含まれる大人向けの楽曲であった。それを前述の後藤田プロデューサーが翻訳し、「健全な」子ども向けの歌へと翻案した。このような翻案が施されている「翻訳歌」は他にも存在し、そのような楽曲と原曲とを比較分析することによって、その差異から「みんなのうた」の放送の目的をより深く分析する。

「ゼッキノー・ドーロ」の分析

「みんなのうた」の「翻訳歌」には、1959年に始まったイタリアの児童音楽祭「ゼッキノー・ドーロ」の入賞楽曲を原曲とするものが複数存在する。日本とイタリアはどちらも第二次大戦の敗戦国で、戦前は軍国少年少女(少国民とバリッラ)が育成されていたという共通点がある。毎年ポーロニャで開催されている同音楽祭について、可能な限りの資料収集を行う。第二次大戦の敗戦国で戦後の同時期に始められた児童音楽文化という共通項を軸にして「みんなのうた」との比較分析を行い、それぞれの成立・展開における特徴を導き出す。

学校教育における楽曲使用の調査

光文書院等より出版の小学校音楽教材「みんなのうた」を中心として、学校教育におけるNHK「みんなのうた」楽曲使用の調査を行い、楽曲の国民的認知について分析する。

#### 4. 研究成果

上記6つの課題にとり組み、それぞれをテーマとした調査研究を行う中で、「みんなのうた」初代チーフ・プロデューサーであった故後藤田純生の遺した資料にアクセスすることができた。遺族自宅での資料調査を行うことによって、映像の失われている1960年代の「みんなのうた」放送楽曲に関する資料(映像写真、ロケ写真、台本等)等も発見し、分析に用いることができた。これまでにアクセスされていなかった同番組最初期における一次的な資料を用いた分析を行うことによって、「みんなのうた」初期の番組形成と受容に関する知見を大きく促進することができた。例えば、後藤田純生が「みんなのうた」開始以前から保有していたと考えられる楽譜集等については、その存在がこれまで全く知られていなかったものである。「みんなのうた」開始の背景を探る手掛かりとして大きな発見であり、「みんなのうた」初期楽曲の出典や、更には番組開始の目的である「誰もがいっしょに楽しめ、うたえる健康な美しいうたを子どもたちに届ける」という理念が、1955年に『日本児童文学』誌上で立ち上げられた「子どもの歌声運動」に端を発したものであったということも導き出すことができた。

また、2019年5月3日に東京・晴海区民館で初期「みんなのうた」の関係者(当時のディレクター、演奏者、ファン会会員等)を招いての研究座談会を行っている。これによって、1960年代の「みんなのうた」の制作背景や、当時の番組の受容についての情報を得ることができた。

更に2021年5月には、研究成果報告として公開シンポジウム「国民文化としての1960年代「みんなのうた」-NHK「みんなのうた」60周年に寄せて」を開催した。佐藤はこのシンポジウムにおいて、研究報告「国民文化としての1960年代『みんなのうた』-後藤田資料の分析を通じて」および「1962年版《大きな古時計》映像再現の試みについて、および映像公開(富澤瑞夫氏との共同)」を行うとともに、「『みんなのうた』特別番組の台本を使用したソロと合唱によるコンサート」の企画制作を行った。このコンサートは1962年11月3日放送「みんなのうた特集」の台本を使用したコンサートであり、台本 曲目 舞台セット 演出という4点についての学術的な再現となる(著作権処理の上で実施。元々の映像は残っていない)。1961年に始まった5分間のミニ番組が、開始わずか1年半の後に大規模の特集を組まれるということは、当時における同番組の大変な人気を裏付けており、その点を視覚的に体感するという意味でも意義のある企画と言える。シンポジウムについては、所属研究機関のHPを通じて動画配信を行っている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 富澤 瑞夫、佐藤 慶治	4. 巻 14
2. 論文標題 みんなのうた《大きな古時計》(1962年)映像再現の試みについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 総合文化学論輯	6. 最初と最後の頁 23~38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/4740658	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 佐藤 慶治、塚本 江里子	4. 巻 15
2. 論文標題 研究ノート : NHK「みんなのうた特集(1962年)」に関する考察 : 再現演奏会にみる児童番組の教育的な意義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 総合文化学論輯	6. 最初と最後の頁 113~119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/4776883	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 25
2. 論文標題 1960年代におけるNHK「みんなのうた」の開始と反響 : 後藤田純生資料の分析を通じて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ポピュラー音楽研究	6. 最初と最後の頁 64-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 13
2. 論文標題 NHK教育音楽番組「みんなのうた」の楽曲に関する研究 - 海外民謡を原曲とする楽曲と児童合唱団の隆盛 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 総合文化学論輯	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 16
2. 論文標題 NHK「みんなのうた」の商業主義への転換 - 「ゼッキーノ・ドーロ」楽曲の輸入を契機として -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽学習学会紀要	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 139
2. 論文標題 NHK児童音楽番組「みんなのうた」の形成と小学校音楽科での楽曲利用における「うたごえ運動」からの影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 46
2. 論文標題 保育におけるNHK子ども番組の楽曲の有効性に関する実践研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精華女子短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 25-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 10
2. 論文標題 小学校音楽科歌唱共通教材の意義に関する考察 学習指導要領との関連性から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 総合文化学論輯	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 133
2. 論文標題 1960-70年代におけるNHK『みんなのうた』と西洋ポピュラー音楽	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 103-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Keiji, Sato
2. 発表標題 Influences from Educational Music TV Program “Minna-no-uta” on School Music Education in Postwar Japan
3. 学会等名 ISME Regional Conference Asia Pacific/APSMER 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 1960年代におけるNHK「みんなのうた」の開始と受容 - 後藤田純生資料の分析を通じて -
3. 学会等名 令和2年度日本音楽教育学会九州地区例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 NHK児童音楽番組「みんなのうた」の形成過程に関する歴史社会学的研究 「ゼッキーノ・ドーロ」との比較分析を通じて
3. 学会等名 日本音楽学会 第70回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 保育におけるNHK子ども番組の楽曲の有効性に関する実践研究
3. 学会等名 全国大学音楽教育学会 第35回九州地区学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 小学校音楽科歌唱共通教材の意義 学習指導要領との関連性から
3. 学会等名 第17回総合文化学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 NHK教育音楽番組「みんなのうた」のポピュラー性に関する研究
3. 学会等名 令和元年度日本音楽教育学会九州地区例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 NHK教育音楽番組「みんなのうた」の楽曲歌詞成立とその影響についての考察
3. 学会等名 日本比較文化学会 第32回九州支部大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 NHK 音楽番組「みんなのうた」における翻訳と音楽ジャンル形成：「大人向け楽曲」の取り入れという視点に基づいて
3. 学会等名 第13回総合文化学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 NHK 教育番組「みんなのうた」の成立と「うたごえ運動」の関連性
3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会 第30回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 学校音楽教育におけるNHK教育音楽番組『みんなのうた』
3. 学会等名 平成30年度全九州大学音楽学会研究発表会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

- ・2021年5月3日開催、公開シンポジウム『国民文化としての1960年代「みんなのうた」-NHK「みんなのうた」60周年に寄せて』  
([http://www.jkajyo.ac.jp/information/info/post\\_714.html](http://www.jkajyo.ac.jp/information/info/post_714.html))
- ・小学館『女性セブン2021/3/11号』(2/25刊行)「NHK『みんなのうた』60年」：取材協力(コメント)
- ・2021年3月6日放送 NHK Eテレ「そして『みんなのうた』は生まれた(1)」：取材協力・資料提供
- ・2021年5月2日放送 NHK総合「どーも、NHK：ことし60年を迎えた『みんなのうた』の魅力を見よう！」：取材協力(コメント)
- ・2021年9-12月開催 横須賀美術館「生誕100年 谷内六郎展」：依頼展示「1962年版大きな古時計」再現映像



## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際シンポジウム「近代の音と声のアーカイブズ」(熊本大学音楽学講座、ボン大学人文学部日本・韓国学専攻との共同開催)	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------